

## A・ピシヨ 『純粋な社会』

松尾, 剛

<https://doi.org/10.15017/10048>

---

出版情報 : Stella. 20, pp.157-160, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

## A・ピシヨ『純粋な社会』

松 尾 剛

A・ソーカルとJ・ブリクモンの共著『知的詐欺』は、よく知られているように、フランス現代思想における数学・物理学概念の濫用を厳しく告発したものである<sup>1)</sup>。そのタイトルもさりながら、いわゆるソーカル事件の張本人が著者の一人であることもあって、同書はきわめてスキャンダラスな著作であるとの印象を与えかねないが、内容は意外なほどに穏当である。著者たちの主張によれば、批判の対象となっているのは、ラカンやクリステヴァ、ドゥルーズやヴィリリオらの思想それ自体ではなく、あくまでポストモダン哲学による物理学や数学の曲解と濫用なのだ。じっさい、ボードリヤールがカオス理論を理解せぬままこの語を使用しているからといって、彼の思想全体が無価値だということにはなるまい。またラカンが「数学的論理やトポロジーを語るにおいてはまったくの山師であるが、しかし人間研究においては重要な貢献をなした」こともまたあり得るだろう。だがそれでもやはり、——と著者らは言う——ある思想家の著作に「知的不誠実」が散見されたならば、彼の思想全体の再検討がなされなければならないだろう。

もちろんソーカルとブリクモンは、純粋科学に由来する知識を人文科学へ応用することに反対しているわけではない。しかしある学問に固有の概念を他領域へ移植しようとするなら、そうすることの必然性が説明されねばならないのは自明の理だろう。にもかかわらず、たとえばドゥブレはゲーデルの不完全性定理に基づいた社会概念を提示するのだが、「この定理と社会組織との間にはいかなる論理関係もないのだ」。ラカンにおけるトポロジーの精神分析への応用然り、クリステヴァによる集合論の詩的言語への応用然りである。何らの説明なしに数学・物理学理論を人文科学へ持ち込むのは「科学に通じていない読者を驚かせ、なにより尻込みさせる」ためだとしか思えない。それが「知的詐欺」でなくて何なのか。

こうしてみると著者たちの主張はおおむね妥当なものであると言わざるをえない。これに対して、『セメイオチケ』における数学用語の誤用を指摘されたクリステヴァの「いうまでもなく私は数学専攻生ではない」という言い訳にはかなり苦しいものがある。数学に通じていないにも関わらず、難解な（著者らに言わせれば「無内容な」）集合論を展開するのは「精密科学の権威を用いて、自らの言葉に厳密さのニスを塗る」という批判を、反証してしまっているからだ。

もちろん我々にとって重要なのは現代哲学における専門用語の誤用などではない。そうではなく、哲学の展開にこれほどまでに科学的知識が随伴している現実が問題なのだ。なにゆえドゥブレは、社会は自らの内に含まれない何かを前提とすることでしか成立しない、別言すれば「閉じられているときには、社会は必ず外部に開かれている」という概念を示すために、わざわざゲーデルの不完全性定理を援用したのか。それは「凡庸な哲学的・社会学的主張に学術用語を纏わせることで、深遠なものに見せようとする」ためでしかないのではないか。

本書評が対象とするアンドレ・ピシヨの新著『純粋な社会——ダーウィンからヒトラーへ』もまた『知的詐欺』と同じ動機から構成された書物であると言えよう<sup>2)</sup>。CNRSの研究者であり、エピステモロジーを専門領域とする著者は、現代における人種主義の復活に危機感を覚えている。だがそれ以上に彼は、反人種主義陣営の無力さとの外れぶりに苛立っているのだ。なるほど、人種という概念それ自体が生物学的に誤りなのだから、人種主義は科学的に無効である、との論法を駆使して、この思潮に対抗する人々の善意は疑えない。しかしピシヨによれば、この論理は無力であるばかりか危険ですらある。なぜならこのロジックにしたがうと、人種が科学的に定義されることがあれば、人種主義を容認せざるをえなくなってしまうからだ。つまり人種主義者も反人種主義者も、政治を考えるに際し、生物学に根拠を求めているという点で、同工異曲なのである。両者ともが、おのれの政治的信念の正当性を〈科学的に〉根拠づけようとしているのだ。しかし生物学固有の用語や概念が、無条件に政治学の領域へ応用されることが許されるのか。それは結局、「凡庸な哲学的・社会学的主張に学術用語を纏わせることで、深遠なものに見せようとする」ことでしかないのではないか<sup>3)</sup>。このような認識から出発して、ダーウィニズムの出

現から優生学を経て人種主義へと至る思想史を辿ろうと試みたのが本書『純粋な社会』である。

ピシヨによれば19世紀において最も重要な生物学者は、クロード・ベルナール、ルイ・パスツール、チャールズ・ダーウィンの3人である。だが思想領域への影響から見た場合、ダーウィンが他の2人を圧倒している。ベルナールとパスツールの理論は、それがすぐさま実践されるものであったがゆえに、イデオロギーの介在する余地は少なかった。ところがダーウィンの進化論は、実践も実験も不可能な、きわめて思弁性の強いものであったため、イデオロギーへと転化しやすかったのである。とりわけその自然選択説を通して人々は、生存闘争などの自然法則の支配する場として社会を把握した。必然的に社会思想は疑似自然科学と化さざるをえない。しかし著者によれば、ここにはひとつの転倒がある。じつはダーウィンの進化論それ自体が、すでにマルサスの人口論から多くの概念を借用しているのである。ということは、ダーウィニズムがイデオロギーとして機能するのは、それが本来的に社会思想に由来する概念で構成されている以上、当然のことなのだ。つまりダーウィニズムとは、科学の洗礼を受けた社会思想だったのであり、科学の名の下に人間を語るからこそ、強大な力を持ちえたのである。

じじつ社会を生物学的法則の支配する自然と見なす考え方は、19世紀の後半から今日にいたるまで、さまざまなヴァリエーションを伴いながら猛威を振るいつづけている。その現れのひとつが優生学である。産業革命期の社会において、ヨーロッパは貧富の差の拡大と下層階級の増大する悲惨を目の当たりにした。しかしブルジョワ層はその原因をもっぱら生物学的条件に探ったあげく、〈退化〉なる疑似科学概念を生み出したのである。つまり社会不安の原因を、社会的条件ではなく、生物学的要素に求めたのだ。貧困層の〈退化〉は生物学的原因によるのであり、彼らは生存闘争の支配する自然においては、本来消滅すべき存在である。ところが人間社会だけが博愛の名の下に彼らの存続を助けてきた。これはまったく倒錯的なことである。社会を今いちど、非情な法則の支配する自然へと戻さねばならない——このような優生学の基本思想がダーウィニズムなくして出現しえないものであったことは明らかであろう。

ナチズムへと至る20世紀の人種主義はこの優生学的思考をモデルとして発達したと、ピシヨは考える。社会にとって望まれざる要素を排除しようとする

優生学から、反社会的遺伝を持つとみなされた人種を排除する思想まで、わずかな距離しかない。そこにヘッケルらの俗流ダーウィニズムが結合した。これによれば、人種は猿に近いものから完璧なものへと進化論的に分類されなければならないのである。かくして社会にとって望ましくない人々を、進化に失敗した人種として根絶することが、自然法則に合っているのだと考えられるようになった。ヨーロッパ社会における根絶すべき人種とは、ロマ民族であり、精神患者であり、ユダヤ人であった。こうしてヒトラーへの道は開かれたのである。

以上ごく簡略にピシヨの主張をまとめてみたが、書評者の見るところ、本書の魅力はやはり、著者のポレミックな姿勢にあるだろう。先に述べたように、彼はある分野に固有の概念を無条件に他分野の学問へ応用しないことを学的原則としている。その原則が幾度も生物学者に侵されるのを見て、ピシヨは本書執筆を決意した。このような論争の姿勢ゆえに、著者は本書のいたるところで挑発的に通説を批判する。その対象となるのは、ダーウィニズムを巡る神話、人種主義の発展にたいする生物学の寄与、歴史家による優生学の忘却、ホロコーストの特権化とそれに伴う他の犠牲者の抑圧、等々である。著者の批判はときとしてかなり厳しい語調を伴うが、だからこそ本書の論旨はかえって辿りやすく、かつ退屈な歴史叙述に陥ることから救われていると言えよう。しかもそれらは膨大な文献学的調査のうえに成立しているがゆえに、強い説得力を持つ。本書は、ひとりフランス文学研究者のみならず、近代ヨーロッパ思想史に関心を抱くすべての者に必携の書物である。

## 註

- 1) Alan SOKAL et Jean BRICMONT, *Impostures intellectuelles*, Paris: Odile Jacob, 1997.
- 2) André PICHOT, *La Société pure. De Darwin à Hitler*, Paris: Flammarion, 2000.
- 3) それゆえ著者の立場は、政治の問題に関して生物学に根拠を求める必要はない、というものである。本書掉尾で著者はいう——「社会と政治にかんするこれらの問題について遺伝学者が口を出せることなどない。注釈と忠告は政治学者や法哲学者に帰すべきものなのだ」(435頁)。